

司馬遼太郎

義経

下





文春文庫

義 経 (下)

定価はカバーに
表示してあります

1977年10月25日 第1刷

1995年5月10日 第34刷

著 者 司馬 遼 太 郎

発行者 堤 堯

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710527-6

文 春 文 庫

義 經
(下)

司馬遼太郎

又 藝 春 秋

義

經

下

旭將軍一騎

一

伝騎が、鎌倉の府へかけこんだ。

最初にかけこんだ伝騎は義経が発したものであり、ひきつづきおなじ変報をもたらす通信用の騎馬が、範頼からも到着した。

「なにごとぞ」

と、鎌倉はさわいだ。伝騎の報ずるところでは、法皇の法住寺御所が義仲によって焼かれたという。皇族や公卿が、何人か殺されたという。法皇は、義仲のためにとじこめられたという。京のうわさでは、義仲はもはや得意になり、「おれは王にでもなれる」とたかだかと笑っているという。いずれにせよ、御所にふみこむなど、古今に類のない横暴である。

「広元、そろそろ潮しほか」

と、頼朝は京の官人くずれのその文官に相談した。相手は大江広元おおえのひろもとである。広元は門地がひくいたため京の朝廷で志を得ず、東国にくだって頼朝の関東政権につかえ大いにその政治能力を買われ、かれ自身もその才能をいきいきと發揮している。

——潮か。

と頼朝がいったのは、義仲追討の好機か、という意味であった。軍を発すべきかどうかについては潮合いを見ねばならない。あげ潮に乗らねばならない、時勢のあげ潮に乗れば人力以外の勢いがつき、何者といえどもうちくだいてしまう——というのが、大江広元の持論であり、頼朝も大いに賛同した。

「潮でござりまするな」

と、広元も大きくうなずいた。潮も潮、天下はこぞって鎌倉軍の発動を、救世主のように歓迎するであろう。

「潮も潮、百年に一度の大いなる満ち潮でござりまするわ」

「申したり」

頼朝は、広元のはればれとした祝ぎことばに膝をたいた。しかしそれにしてもなんとがまなづよくこの時機を待ったことであろう。京の義仲をこの窮地に追いこんでゆくために、どれほどの我慢をかさね、どれほどの謀略と外交をかさねてきたことか。

「すぐ陣触れをせよ」

頼朝は、侍所^{さむらいどころのべつどう}別当に命じた。範頼と義経にそれぞれ、兵を増派し、京を攻略せしめることであつた。

一方、義仲は京でいそがしい。

ちなみに義仲は寿永二年十一月下旬に法皇をとらえてクーデターに成功し、翌三年正月二十日に近江瀬多^{せだ}の湖岸で敗死するまでのあいだ、六十日ほどしかその栄華^{えいが}の期間はない。この期間、かれにとっていかに楽しく、いかにつらく、いかに多忙であつたか。

「わしは、王にもなれるわ」

と、法住寺合戦のあと、よろこびのあまりわめいたのは、事実であった。このあたり、童児のように無邪気であった。そのまわりに木曾の家ノ子や北陸道からきた田舎武士どもをよびあつめ、「みな、おれに願ひ出ろ、大納言になりたければ大納言にしてやる。中納言になりたければ即座に中納言だ」

と大いにはしゃいだが、軍師の大夫房覚明にたしなめられ、

——公卿は藤原氏になるもの。清和源氏ではなれませぬ。

ときとされると、「そうかい」と頭をかいてあきらめた。そのかわり、法皇に強要して従四位下^げにのぼった。鎌倉の頼朝が、従五位下兵衛佐^{ひょうえのすけ}にすぎぬところからみれば、義仲は頼朝をしのぎ、源氏一統のなかで、最高位をえたことになるであろう。

公卿は藤原氏しかたれぬということで、自分のすきな連中はどしどし高位につけ、きれいな連中はぜんぶ官からたたき落した。義仲自身は王にも公卿にもならなかったが、

「しかしおれは事実上の王だ」

として、白昼、公卿の屋敷に押し入っては娘の部屋に入りこみ、

「のう、伽^がをせい」

と、手籠^{てご}め同然で押し入り婿^{むこ}になった。この点、義仲は京における全能者であり、幾人の娘の婿になるのも、かれにとって自由自在であった。こういう行為で権力のたのしみを味わう以外、大夫房覚明がいう「公卿になれぬ清和源氏」の身としては、このよろこびのあらわし方がない。前関白松殿基房の娘の部屋で、昼間から義仲は垂れこめていたとき、叔父の新宮十郎行家が播磨^{はりま}（兵庫県）の室ノ津^{むろのつ}で大敗したというしらせを、手の者からきいた。

「ねったい！」

と、義仲は寝巻のまま縁に出てきてさげんだ。ねったい！ と叫ぶのは義仲のくせで、木曾だけでなく京でも通用する俗語である。

「畜生」

という意味であろう。行家叔父めは、義仲が法住寺御所を攻める直前、それと察して、義仲との共同責任からのがれるために義仲のゆるしめえず西海へ遠征し、平家の大軍に挑戦した。

——あの小勢で、平家に勝てるとおもっているのか、あの叔父は。

と、義仲はあとでそれをきき、行家の低能じみた軍事的能力をあざけた。が、当の新宮十郎行家としては予定の敗戦であった。

行家は、入りくんだ保身感覚をもっている。義仲の衰弱してゆく運命をみて、

(こいつとは、一緒にいられぬ)

とおもった。やがて鎌倉軍がくる。そのとき義仲と一ツ釜のなかで煮殺されるのはまっぴらである。

かといつて、頼朝があればほど自分を憎んでいる以上、頼朝には降伏できない。頼朝がゆるさぬであろう。頼朝が義仲と不和になった直接の原因は、行家であった。「行家の身柄をこっちへ渡せ」という頼朝に対し、「身をすり寄せてきた血縁いっけん叔父を、男としてむぎむぎと渡せるか」といって義仲がはねつけた、——それが動機であった。とにかく、行家は、近畿の他の小さな土着源氏どものように義仲をすてて頼朝に走るということはできない。

結局、行家は身のおきどころがなかった。京にいたたまれぬままに、敵の平家にむかったのである。それが、みごとにやぶれた。

すでに平家は西海王国ともいえるほどに巨大な存在になっており、行家ごときが小勢をひきいて挑戦しても、巨岩にたまごを投げつけたほどの結果にしかならなかった。

行家はさんざんにやぶれ、身一つで逃げ、漁船をやとって大坂湾を北から南へ乗りきり、和泉国深日（大阪府泉南郡）の港に上陸し、そこから野を走って河内国長野の石川源氏の城館に身をよせる。

「あいつ、死ね」

義仲は、縁側に突っ立ったまま、はるかに河内の空をながめ、そうのろった。あの狐のような策士は、こそこそ策略をめぐらすばかりで、いくさに弱いこと、この上ない。

「死ね、死ね」

叫びながら、もとの几帳のなかにもぐりこんだ。姫はおどろいた。

「死ね、と申されますのは？」

「おれの叔父のことよ」

と、義仲は姫のほそいからだを抱きすくめた。この前関白松殿の姫君は、小子という。その名のとおり目鼻も手足も、すべてが小づくりであったが、美しさは都でもたぐいがないであろう。松殿はこの姫をゆくゆく帝の御后にしようとおもい宝石のように愛しんできたのだが、押しこんできた義仲のためにむぎむぎとただの情婦にされてしまった。

その松殿邸をひきあげて館に帰ると、さらに詳報が待っていた。

行家は、河内や大和の兵を七十人ばかりかきあつめて、

——義仲を討つ。

と称し、反旗をひるがえしたという。

「なぜあの叔父が、おれを討たねばならぬのだ」

義仲は、この期になってもそのあたりの機微がわからない。天性、政治感覚が欠落しているのであらう。

「おれがあれほど恩をかけてやったではないか。おれが頼朝とこんにちのようになったのも、もとはといえば行家叔父をかばったからだ」

「すべては、保身のためでござる」

大夫房覚明はいった。

「人間すべて自己のことのみ。おのれのため以外は、たれも考えておりませぬ」

「おれは、売られた」

「おなげきあるな。あのようなお人を信用なされたあなた様の落度でござりまする」

覚明の解釈では、行家は頼朝の好感をかせごとくとおもって、わずか七十騎で反義仲の旗をかかげたのであらう。行家の旗は、義仲にみせるためではなく、遠い鎌倉へのせいっぱいの媚態であつた。

「あの狐は、生かしておけぬ」

生きつづけるかぎり、新宮十郎行家はそのこまかい利欲計算からひとを陥れつづけるであらう。覚明も、それに異存はない。

「刺客を、さしむけなされ」

「なに」

義仲は一瞬呼吸をとめた。やがて、その意味がわかると、大声で怒りだした。
「おれは源家の棟梁である。夜ねずみのようなものをさしむけて人を殺せるか」

堂々たる合戦で雌雄^{しゆう}を決せねばならない。おのれの武勇をもって名に綺羅^{きら}をかざる者こそ武家の棟梁^{とうりやう}というのだ、みろ、この義仲こそそれである——と言ひ、一同の反対を押しきり、たかが行家を討つために、樋口次郎兼光以下の主力部隊をさき、このため都の木曾勢はいよいよすくなくなった。

二

この間^{かん}、義仲は、無為にすごしていたわけではない。それどころか、かれは女のもとにさえ一刻以上は居なかつた。女のもとをそくさと出たかとおもうと法皇のもとに行き、ついで幼帝のもとに参内^{さんない}して摂政に会い、さらには近国へ諜者を出し、館にはいるときはたいい軍議だった。日に七度も軍議をひらいたことさえあった。

ついに思案を決した。

平家と同盟することである。

「それしかござりませぬ」

と、覚明らがすすめた。義仲としては宿敵の平家と同盟するなど、感情のうえで整理のつかぬ飛躍であつたが、しかし、鎌倉の頼朝とたたかうためにはそれ以外の妙案はない。かれをそこにまで追いこんだのは、頼朝自身であつた。頼朝は平家よりもむしろ義仲が敵であつた。なぜならば義仲の手に京都がにぎられている。

「あの男には、骨肉の情などないのだ」

と、その点に多分に甘つたれていた義仲はこんどこそ決意すべきであつた。平家と手をにぎり、その共同の敵の頼朝にあたらねばならない。

使者を、すぐ西方へ出した。この時期、平家は室ノ津（兵庫県）をもって最前線の本営としていた。すぐ一族による評定をひらいたが、論客の平知盛（清盛の四男）が反対し、

「いかに末世になったとはいえ、木曾などに語られて都へもどれるか」

むしろ——と知盛はいう、兜をぬぎ、弓のつるをはずして降人（こうじん）になって来い、と返答すべきであるというのである。一同この知盛説に賛成し、そのように返答して一蹴した。平家の実力はすでにそう傲語（ごうご）できるだけに再生しつつあったし、第一、義仲も行家も、西国での対平家戦に大敗しているのである。

この使者が帰京したとき、

「ねったい！」

と義仲がさけんだのは、わが身に対する罵声であった。数カ月前の全勝將軍であった自分をおもうとき、このみすばらしさはどうであらう。

「覚明、ゆけ」

と、この唯一の謀臣を、再度の使者として立てた。条件も、屈辱的なほどに譲歩した。

「平家が都にのぼってくればよろこんで迎える。法皇の身柄も平家にあずける」

というものであった。義仲が、打出の小槌（こづち）のように大切にしている法皇をさえ平家にわたすというのである。さらにその約束を反故（はぐご）にせぬという証拠に、神文（しんもん）を書いた。

神文は、熊野誓紙（くまのちがひ）に書けばよい。それが世間の慣例である。しかし、窮しきっている義仲は、この誓いを鉄に彫った。鉄鏡を鑄（い）させ、その鏡面に熊野権現（くまのぐんげん）のご神体を彫りあらわし、その裏面にひらがなをもって起請文（きしょうぶん）をかけた。

覚明は西下し、その鏡を平家の総大将宗盛にささげて講和のあかしにしようとした。平家も、

「よろしかろう」

といってくれた。寿永三年の正月はじめのことである。覚明は、ほっとした。

「されば、いつ都にのぼっていただけます」

「早いほうが、義仲もうれしかろう」

「それはもう、それに越したことはござりませぬ。御上洛あれば、義仲も勇み、平一門の一将となつてかいがいしく立ちをたたくでございましょう」

と覚明がいった内容を義仲がきけば怒るであろう。しかしこの困難な和議は、そこまでへりくだってしまったわねばまとまるものではない。

「すると、義仲は降人か」

宗盛でさえ、覚明のおもいきった言葉に意外さを感じた。覚明は、その小さな顔を小きぎみに横にふった。

「それはすべて、お肚はらのなかに」

というのみである。このあたりは微妙なところで、義仲の自尊心を尊重するためそれは表むきにいわないでくれということであろう。

覚明はいそぎ京にもどり、和議の成功を義仲に告げた。義仲は大いによろこび、

「もはや、頼朝はおそるるに足らぬ」

といったが、十日ばかりしておもわぬ事件がおこった。丹波（京都府下）においてである。和議の条件として、「丹波を平家に開放する」という一項があった。開放とは租税をとりたてる意味でなく、募兵することであった。丹波を、木曾と平家の共同募兵地とした。

平家にとっては、講和の妙味はこれであった。すぐ西海から平家の募兵官が丹波に入りこんだ

が、この連中が、現地の木曾方の兵に追いまくられ、十三人まで殺された。その首がその戦勝のしるしとして京に送られてきたとき、義仲は案外この事件に鈍感であったが、外交担当者の大房覚明は、

（これで、木曾の運もきわまつた）

と、蒼白になった。平家はこの一件を条約違反として怒るであろう。義仲の誠意をうたがい、京に兵をのぼらせて来ないにちがいない。

「平家へ、詫びに参りましょうか」

と、念のために義仲にきいた。が、義仲には義仲の理屈があった。

「無用だ」

という。喧嘩ではないか。喧嘩である以上負けた者は恥辱であり、勝った者は大いに名誉である。勝者が敗者に詫びることはない、というのである。木曾谷の素朴な理屈であった。しかしこの理屈では天下は治められないであろう。

（そろそろ、逐電するしおどきだな）

と、覚明はおもった。平家がのぼって来ねば木曾義仲の没落はあきらかである。家ノ子でもないのに最後までついていて命をおとしても、つまらない。

その夜、覚明は逐電した。

「あの坊主、遁げたか」

義仲は朝餉のときそううなずき、そのまま箸もとめずにめしを掻きこんだ。義仲にとってその程度の男であった。参謀であると自認していたのは覚明のほうで、義仲はそんな存在をさほど重要だとはおもっていない。理屈っぽい坊主が何人いたところで、夜討、朝駈けにどれほどの役に

たつわけでもなからう。

が、その義仲も平家がのぼって来ぬという一事については、閉口した。平家の大軍団が来ねば京都防衛もできず、進撃して鎌倉軍を討つこともできない。

「なぜだ、どうしたわけだ」

と、ほうぼうで調べさせると、どうやら丹波事件で平家が硬化してしまっているという。

「そうか」

義仲は、さりとてといった。もともと、ものに執着しゅうじやくのうすい男であった。

「平家も多年の都ずまいで公家根性が染しみて、根性が小さい。そんなやつらを頼みにしたおれがわるかった」

あっさりあきらめた。あとの方法としては、一つしかない。この京をすてる。都をすてて北陸へ落ちることであった。

しかし、惜しい。

いかに物への執着がうすいといっても、この宝石のような京をすてるのは惜しすぎる、考えてもみよ、法皇も天子もわが手もとに囲ってある。日本の朝廷は手飼いの鶏小屋と同様、わが所有もつになっている——そのうえ私情をいえば、幾夜も枕をかわした愛いしのものが何人もこの都の大路小路にいてではないか。

（それらを捨てて、草ぶかいもとの大田舎にもどれるか）

ということが、義仲の思いきりをわるくし、いたずらに日をすごした。

「いっそ、法皇を連れ去るか」

日に何度も、それをいう。悪意があるわけではなく、義仲は頼朝のような読書や知的瞑想の習